

期待されている。

今後、理学療法の評価を確立するためにも、この分野の臨床的有用性の道が開かれることを期待したい。

(藤田学園保健衛生大学病院理学診療科 岡西哲夫)

測定・評価-III

〔演題90〕

加齢と共に運動機能がどの様に変化するか、特に高齢者ではどうか、は共通のテーマである。興味は、1) 運動年齢評価法を用いて、運動発達の逆の過程を辿るかどうかが、調べたこと、2) 80歳群に有意の低下があったこと、3) 運動項目により低下の有意差が異なること、4) 小児より更に、老人の機能低下は、個人差・分散が大きいこと、であった。男女差・低下の予防、速度をゆるめるために何をすべきかなどを考えながら、拝聴した。

〔演題91〕

前演題に続いて、高齢者の運動機能を考えるのによるヒントを得た。当研究からも80才群の有意性が出ているようである。Y方向に比し、X方向の動揺が増加するという結果を、さらに突き詰めて欲しいと感じた。スライドの一枚が殆んど読めなかった。工夫を期待したい。

〔演題92〕

発表が大変分りよかった。スライドの文字が大きく、明瞭で読みよかった。短時間内の発表では、工夫が聴衆の理解を助ける。演者の方法に従って私も試みたが、歩行量の測定にはよい方法と思った。歩く意欲が高まるので驚いた。歩行以外の活動は計れないので、歩行しないと活動量が不足しているような気持ちに、患者さんはなるかも知れない。演者がまとめて述べられたように、障害者の全般的な活動性の向上に、今回の結果を結びつけることができたら、再び発表して頂きたい。

〔演題93〕

歩行分析の対象者として先天性全盲者は、興味深い。VTR(測方)と研究者の観察だけでは、結果が制限される。歩行分析の他の方法も利用されるように。またVTRによる分析の補いとして、関節可動域検査・徒手筋力検査をされたが、バランス反応も調べたらよいと、考えた。

(国立療養所東京病院附属リハビリ
テーション学院 田村美枝子)

骨・関節-V

<演題94>

54年~59年までの5年間の Moore 型人工骨頭置換術178例(男25,女153)年齢41~96才(平均78)検討結果

である。

術後治療期間は自宅退院者約60日、特別養護老人ホーム転院者43日で、自宅退院者の方が2週間ほど長い。入退院時の生活環境変更者は178例中46例25%であるが、その理由については述べられていない。退院時の歩行独立群62例、歩行補助具使用群61例(歩行器使用41例)、歩行不能群56例(車椅子使用34例)であるが、歩行器、車椅子使用は再転倒防止のためとしている。予後不良因子である、痴呆53例、片麻痺29例中70%が歩行不能である。これらの悪化程度には触れていない。

<演題95>

大腿骨頸部外側骨折の Ender Nail 法19例(50~80) Stable type 11例, Unstable type 8例, Compression hip screw 法(33~93) Stable type 14例, Unstable type 9例の比較検討結果である。歩行の荷重時期は Ender 法が1週間程早く、ADLはCHS法が優れているとしている。Ender pin 脱出とCHS法の Unstable type の術後経過により、結果が異なると思われるが。

<演題96>

大腿骨頸部内側骨折のCHS法6例の理学療法プログラムと成績について述べたが、症例E・Fは女性で高齢、精神病の合併症があり、骨頭壊死に陥っている。これまでの追跡調査結果や手術の適応から推測すると当然の結果ともいえないだろうか。

<演題97>

股関節臼蓋形成術44例の理学療法と術前、術後の結果を報告している。

中殿筋の筋力強化方法と筋力について、会場と質疑応答されたが、疑問がのこされた。

歩容や関節内運動、筋の短縮、痛みの程度、部位などの評価なども考慮すべきではなかったらうか。

<演題98>

骨セメントを用いない方法での慈大式THRの理学療法と成績について紹介された。骨セメントの生体と与える影響が検討されている今、これからの進展を注目したい。セルフロックのためか、対象者は比較的若く、疾患もOAが多い。骨の硬度や再生力など手術適応範囲が限定されるためか。

(浜松医科大学 竹谷春逸)

骨・関節-VI

演題99~102までの座長を務めさせて頂いたが、この論文をさらに継続して研究し、もう1度発表されることを願ってコメントを述べさせて頂きます。

<演題99>「RAの膝関節全置換術後におけるROMの